



ききかんしゃ うご じょう気機関車はどうやって動くの

なが あだ にほん てつどう しゅやく ききかんしゃ
長い間、日本の鉄道の主役だったじょう気機関車

1872年（明治5年）、東京～新橋間に日本で最初の鉄道がしかれてから、明治、大正、そして、昭和の10年代まで、じょう気機関車は日本の鉄道の主役でした。特に、D51型のじょう気機関車は「デゴイチ」とよばれ、最も数多く作られました。

しかし、あまり高速のスピードが出せない、煙を出して不衛生、燃料となる石炭の良質なものが少ないなどの理由で、やがて、電気機関車やディーゼル機関車にとってかわられるようになりました。

き ちから りょう うご じょう気の力を利用して動く

じょう気機関車は、燃料の石炭を火室で燃やし、ボイラーの水をあたためてじょう気を作ります。じょう気をじょう気だめにためて、運転室にあるかげん弁のハンドルを引くとじょう気は主じょう気管を通過してかねつ管に入ります。

それからじょう気はシリンダーに入り、その力でピストンを左右に動かします。このピストンの動きを「主連棒」で動輪に伝えて回します。こうして、じょう気機関車は走ることができるのです。（監修 青木国夫）

